

社会人基礎力を用いたディプロマポリシーの検証法

Verification Method of the Diploma Policy Applying the Generic Skills

和島 孝浩* ・ 佐々木 千夏** ・ 椎名 澄子**
北島 滋***

Takahiro WAJIMA * ・ Chinatsu SASAKI ** ・ Sumiko SHIINA **
Shigeru KITAJIMA ***

*旭川大学短期大学部 生活学科 食物栄養専攻

**旭川大学短期大学部 幼児教育学科

***旭川大学短期大学部 生活学科 生活福祉専攻

キーワード：PROG、リテラシー、コンピテンシー、対人基礎力、対自己基礎力、
対課題基礎力

Abstract

For the purpose of verifying the diploma policy (DP), we had junior college students (Food and Nutrition major) of Asahikawa University take the PROG test, and evaluated their generic skills. Compared to the same grade students in other universities, the 1st-grade students: in the literacy, "information gathering", "information analysis" and "problem finding", etc. tended to be high but "planning" tended to be low; in the competency, "affinity" and "cooperativity", etc. as interpersonal skill elements tended to be low. The 2nd-grade students: in the literacy, elements generally tended to be low; in the competency, "durability" (self-management skill elements) and "practical ability" (problem-solving skill elements) tended to be high. From the above, it was suggested that DP could be verified in more detail applying the generic skills together with the Grade Point Average (GPA) and the proficiency test for nutritionist.

Key words : PROG, literacy, competency, interpersonal skill, self-management skill, problem-solving skill

1. はじめに

1. 旭川大学短期大学部の教育改革

旭川大学短期大学部（生活学科：生活福祉専攻・食物栄養専攻、幼児教育学科）では「質の保障」に向けた教育改革に取り組んでいる。平成 29 年度に各学科専攻において 3 つのポリシー、即ち、ディプロマポリシー（DP）、カリキュラムポリシー（CP）およびアドミッションポリシー（AP）を策定し、平成 30 年度はシラバ

スの改訂（カリキュラムツリー・マップ、ナンバリング）や授業評価の改善などを行ったところである。

2. 大学教育で求められている社会人基礎力

社会人基礎力とは経済産業省が 2006 年に提唱した概念であり、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として定義されている。社会人基礎力は、

「考え抜く力」、「チームで働く力」、「前に踏み出す力」の3つの能力と12の能力要素から構成されており、同じような概念として学士力や学力

の三要素（文部科学省）、人間力（内閣府）などがあり、近年、大学教育を通じてその育成が求められている（表1）。

表1 社会人基礎力と学士力

社会人基礎力（経済産業省）		学士力（文部科学省）	
考え抜く力 （シンキング）	課題発見力	汎用的能 技	問題解決力
	計画力		論理的思考力
	創造力		情報リテラシー
チームで働く力 （チームワーク）	発信力		数量的スキル
	傾聴力		コミュニケーションスキル
	柔軟性		チームワーク・リーダーシップ
	状況把握力	市民としての社会的責任	
前に踏み出す力 （アクション）	規律性	態 度 性 志 向 性	倫理観
	ストレスコントロール		自己管理能力
	主体性		生涯学習力
	働きかけ力	知識・理解	
実行力		総合的な学習経験と創造的志向	

3. PDCA サイクルに基づいた3つのポリシー（DP、CP、AP）の運用

本学部では3つのポリシーの策定後、シラバスの改訂などを行い、平成31年度はポートフォリオの作成を検討しているところであるが、この教育改革の最終的な目標は「PDCA サイクルに基づいた3Pの運用」である（図1）。PDCA サイクル「計画（Plan）→実行（Do）→評価

（Check）→改善（Action）→計画（Plan）」で特に大事になってくるのが評価（Check）であるが、取り扱うデータが膨大で分析まで辿り着けないケースや、データの信頼性の問題で正確な評価が行えないケースが多い。そのため、誰が見ても理解できるような「客観的なデータによる可視化」が重要なポイントになってくる。

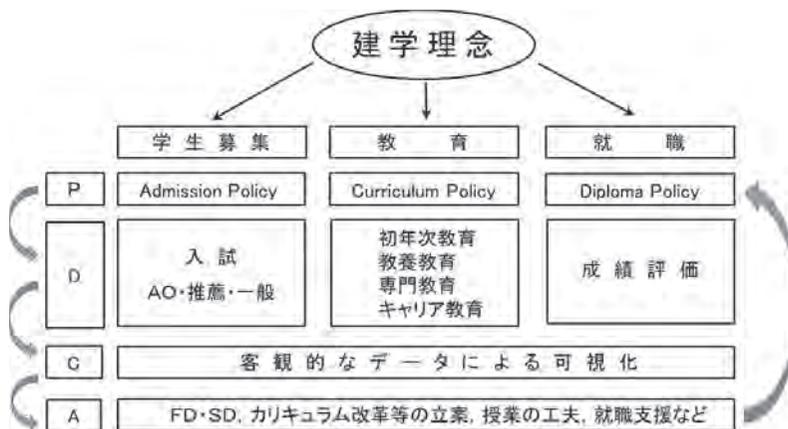


図1 PDCA サイクルに基づいた3Pの運用

「PDCA サイクルに基づいた3Pの運用」では、3つのポリシーそれぞれにおいてPDCAを回すことになるが、全体としては、「DPの検証→CPの見直し→APへの反映→DPの（再）検証」という流れが自然なので、まずはDPの検証に取り組む必要がある。そこで本研究では、DPの検証法の方策として、近年、多くの大学で導入されている社会人基礎力テスト「PROG」を旭川大学短期大学部の学生に試験的に受験させ、その結果を基にDPの検証を試みた。

II. 方 法

1. 社会人基礎力テスト「PROG」：ジェネリックスキルを測定して数値化

(1) PROGの概要

PROG (PROGRESS REPORT ON GENERIC SKILLS) は、株式会社リアセック (リクルート

関連企業) と学校法人河合塾が共同開発した社会人基礎力テストの一つで、大学教育を通じた社会人基礎力の開発を測定と育成の面から支援するプログラムである。PROGは、専攻・専門に関わらず、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向 (以下、ジェネリックスキルと呼ぶ) を可視化し、客観的なデータに基づいた教育成果の検証を可能にしている。2014年4月にPROGはスタートし、受験者数は約66万人 (2014年～2018年7月までの累計) に達し、全国418校の大学で実施されている。

PROGの最大の特長は、ジェネリックスキルをリテラシーとコンピテンシーの2側面に分けて評価する事である。リテラシーとは「知識を活用して問題を解決する力」、コンピテンシーとは「人と自分にベストな状態をもたらそうとする力」である (表2)。特に、コンピテンシー

表2 社会人基礎力テスト「PROG」の測定項目

リテラシー：知識を活用して問題を解決する力		
情報収集力		課題発見・課題解決に向けて、幅広い視点から適切な情報源を見定め、適切な手段を用いて情報を収集・調査し、それらを適切に整理・保存する力
情報分析力		事実・情報を思い込みや憶測ではなく、客観的にかつ多角的に整理・分類し、それらを統合して隠れた構造を捉え、本質を見極める力
課題発見力		様々な角度、幅広い視野から現象や現実を捉え、その背後に隠れているメカニズムや原因について考察し、解決すべき課題を発見する力
構想力		様々な条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構築し、その過程で想定されるリスクや対処方法を構想する力
言語処理能力		語彙や類義語、言葉のかかり受けなど、日本語の運用に関する能力
非言語処理能力		数的処理や理論、図の読み取りなど、情報を読み解くために必要な (言語以外の) 基礎的な能力
コンピテンシー：人と自分にベストな状態をもたらそうとする力		
対課題基礎力	課題発見力	問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う
	計画立案力	問題解決のための効果的な計画を立てる
	実践力	効果的な計画に沿った実践行動をとる
対人基礎力	親和力	円滑な人間関係を築く
	協働力	協力的に仕事を進める
	統率力	場をよみ、目標に向かって組織を動かす
対自己基礎力	感情制御力	気持ちの揺れをコントロールする
	自信創出力	ポジティブな考え方やモチベーションを維持する
	行動持続力	主体的に動き、良い行動を習慣づける (学修行動)

に関しては国際的にも重要視されており、OECDにおいてもキー・コンピテンシー（「自律的に行動する能力」、「社会的に異質な集団における交流能力」、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」など）が定義されている。

(2) リテラシーテスト：知識を活用した問題解決力を4つの領域で測定・評価

問題解決のプロセスは一般的に、「情報収集」→「情報分析」→「課題発見」→「構想」→「表現」→「実行」という過程を辿る。PROGでは、リテラシー（知識を活用して問題を解決する力）を、「情報収集力」、「情報分析力」、「課題発見力」、「構想力」という問題解決のプロセスに不可欠な4つの要素（言語処理能力と非言

語処理能力を加えると6つの要素）で評価している。具体的には、現実的な場面を想定して最適解を求めさせるオリジナル問題によって、単なる知識ではなく、学んだ知識をどのように活用できるかという、実践的な問題解決能力を測定する。評価にあたっては、正答数や点数の差だけでは測れない潜在的な個々の能力を可視化する「ニューラルテスト理論」による分析方法を導入し、学生の現状を段階的な数値（総合評価：レベル1～7、能力要素：レベル1～5）で判定する仕組みになっている（表3）。また、それぞれのレベルの到達目標についても明示化されており、学生は自らリテラシーレベルを上げていくためPDCAサイクルを実践していくことができるようになっている。

表3 リテラシーの判定

Level. 1	大学生として期待される基本的なリテラシーの修得が求められるレベル
Level. 2	大学生として期待される基本的なリテラシーをある程度修得しているレベル
Level. 3	大学生として期待される基本的なリテラシーをもう少しで修得できるレベル
Level. 4	大学生として期待される基本的なリテラシーを修得しているレベル（初年次レベル）
Level. 5	社会人として期待される基本的なリテラシーをある程度修得しているレベル
Level. 6	社会人として期待される基本的なリテラシーをもう少しで修得できるレベル
Level. 7	社会人として期待される基本的なリテラシーを修得しているレベル

(3) コンピテンシーテスト：よりリアルな能力を測定するための設問設計

コンピテンシー（人と自分にベストな状態をもたらそうとする力）のような、社会に普遍的に求められる能力を客観的に測定する際の問題点として、ある程度社会性のある者なら、自分にその発揮能力があるかどうかとは関係なく（社会的な価値観に基づいて）、回答をコントロールする事が挙げられる。そのため、PROGでは両側選択形式や場面想定形式を採用することにより、恣意的に回答できないような（本音で回答せざるを得ない）設問を採用している（図2）。例えば、両側選択形式では、A、Bそれぞれに価値を感じるような両義性の項目を配置し、どちらにより近いかを強制選択させる。場

面想定形式では、誰でも経験しそうな葛藤シーンに対して、一般的に肯定的と感じられる回答を用意し、被検者がどの程度実践してきたかその頻度を尋ねる。評価にあたっては、実社会にリンクした形、即ち、実社会で活躍する若手リーダー層の行動特性をデータベース化し、その回答と比較判定する方式を取ることで、実社会で通用する可能性を示すよう設計されている（図3）。コンピテンシーもリテラシーと同様に段階的に判定されるが（表4）、企業の規模や業種の違いなど、所属する組織によって求められる能力が異なることも踏まえ、複数の判断基準による能力の多様性も提示している。

【両側選択形式】

選択肢 A	Aに近い どちらでもない Bに近い					選択肢 B
初対面の人と話す時でも、相手と距離をおかず親しく接する	1	2	3	4	5	初対面の人と話す時には、距離をとって礼儀正しく接する

【場面想定形式】

設問：チームで作業に取り組む時、一人だけ手を抜いているように思える人がいたら、あなたはどのように行動する事が多いですか。

選択肢		低い	これまでの経験頻度			高い
A	何か困っているのではないかと声をかける	1	2	3	4	5
B	真剣に作業に取り組むように注意する	1	2	3	4	5
C	黙って自分の作業に集中する	1	2	3	4	5
D	一緒に頑張ろうと励ます	1	2	3	4	5

図2 コンピテンシーテストの設問例



図3 コンピテンシーの評価方法

表4 コンピテンシーの判定

Level. 1	今は力を発揮できていないが、きっかけがあれば大きく成長する可能性大のレベル
Level. 2	自分なりにやるが、社会の期待には届かないレベル
Level. 3	社会の期待にある程度合致するレベル
Level. 4	社会の期待に合致するレベル
Level. 5	個人として、社会の期待以上に応えることができるレベル
Level. 6	リーダーとしてチームに対して働きかけ、社会的に評価されるレベル
Level. 7	周囲に働きかけて状況を変えることができる、革新的なレベル

(4) PROG の信頼性と妥当性

PROG テストは信頼係数（β版の回答傾向の分析）を公表しており、外的基準と照らし合わせても妥当性が高いと考えられている（表5）。

また、全体傾向としては、入学難易度が高いほどリテラシーは高くなるが、コンピテンシーにおいてはそのような傾向はあまり認められない（図4）。

表5 PROG テスト（β版）の信頼係数

リテラシー	コンピテンシー								
	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	親和力	協働能力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
総合問題解決力	0.83	0.86	0.88	0.79	0.82	0.75	0.80	0.83	0.79

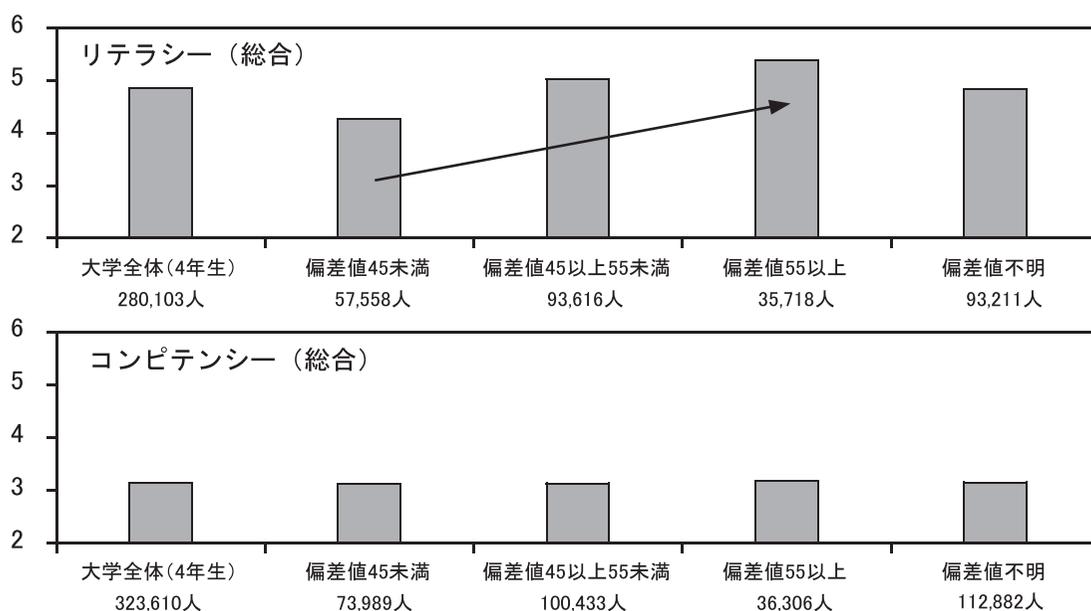


図4 PROG テストの結果と受験者の大学偏差値との関係

(5) 主体的に行動させるための診断結果・能力開発ハンドブック

受験した学生には診断結果と能力開発ハンドブックがフィードバックされる。診断結果には、学生のジェネリックスキルを最大40項目にて提示し、経年受験の場合は、前回の測定結果も提示し、成長を確認できるようになっている。能力開発ハンドブックには、今後の学生生

活でジェネリックスキルを醸成させる方法を多くのアドバイスを含めて解説している。また、ワークシートも付いており、就活生は測定結果から明らかになった自己の強みを自己PRに繋げていけるように工夫してある。大学（教員）には、学生の個人データ（要約版）と、他大学との比較のための統計データ（大学全体、専門別・学年別）がフィードバックされる（図5, 6）。

旭川花子さんの診断結果			
<p>あなたの能力開発状態は、リテラシーが高く、コンピテンシーが低い傾向にあります。学習能力が高く知識が豊富な一方、それを活かそうと行動する経験がやや不足しています。たとえば、ここぞという場面で「どうすれば良いか」「どうすべきか」はわかっているのだけど、どこか自信を持って行動できていない、ということはありませんか？仲間と一緒にいろいろな経験をする機会を持ったり、まずはやってみよう！の精神で行動から学ぶ経験を積むことが大切です。これまでの経験を振り返り「なぜできたの？」「どうしてやろうと思ったの？」と自問自答することで、何気ないことと思いついていた行動が、実は自分の強みだと自覚できる場合もあります。新たな自分を発見し、さらに成長の機会を作り出すために、このレポートと付録の「PROGの強化書」を活用して下さい。</p>			
リテラシー（総合）：Level. 6		<p>あなたのリテラシーはLevel. 6と判定されました。問題解決力に関しては、社会人ビギナーとしては高いレベルに開発されているといえます。例えば、与えられた情報を基に物事の本質を見抜くだけでなく、「それなら、こんな問題もあるのでは？」と関連する出来事を類推することができるでしょう。しかし、優秀な社会人にはより多角的に情報を集め分析することが求められます。データや文章の扱い方、構造的な思考、客観性のある伝え方といったことに一層磨きをかけてゆきましょう。</p>	
情報収集力	Level. 4		
情報分析力	Level. 4		
課題発見力	Level. 5		
構 想 力	Level. 4		
言語処理能力	Level. 4		
非言語処理能力	Level. 3		
コンピテンシー総合：Level. 3		<p>あなたのコンピテンシーはLevel. 3と判定されました。人と自分にベストな状態をもたらそうとする力に関しては社会人ビギナーとして、あとちょっとの努力が期待されるレベルといえます。チームの中でいま自分が成すべきことを自分で考えて、行動することができるでしょう。時にチームの力を借りるための働きかけもできます。しかし、チームの他のメンバーを刺激する行動や情報発信に関して、あなたに対してまだまだ物足りないと思っている人が多いのでは。自分の意思を明確に持ち、存在を示す意識を磨き始めましょう。</p>	
対 人 基 礎 力 Level. 2	親 和 力		Lv. 1
	協 働 力		Lv. 1
	統 率 力		Lv. 4
対 自 己 基 礎 力 Level. 5	感情制御力		Lv. 3
	自信創出力		Lv. 6
	行動持続力		Lv. 5
対 課 題 基 礎 力 Level. 3	課題発見力		Lv. 5
	計画立案力		Lv. 2
	実 践 力	Lv. 3	

図5 PROGテストの診断結果サンプル（要約版の表面）

2. 受験概要：短大（栄養士コース）の1・2年生によるWEB受験

2018年9月、旭川大学短期大学部生活学科食物栄養専攻に在籍する1年生41名と2年生43名の計84名がWEB上にてPROGテストを受験した。テストは、リテラシー問題とコンピテンシー問題の2つからなり、リテラシー問題は30問(制限時間45分)、コンピテンシー問題は251問(制限時間無し、40分を目安に回答)である。

Ⅲ. 結 果

1. リテラシーテスト：知識を活用して問題を解決する力

(1) 1年生の現状：情報収集力、情報分析力、課題発見力などは高いが構想力は低い傾向

リテラシーテストの結果（1年生）を表6に示す。受験者数は短大全体としては5,658人(34校)が受験し、その内、栄養系は570人（7校）であった。本学部生の総合評価は3.7であり、内訳としてはレベル1～3の低水準が41%、レベル4～5の中水準が46%、レベル6～7の高

旭川花子さんの強み（コンピテンシー）開発度ランキング			
順位	能力要素		関連能力
1	主体的行動	自分の意志や判断において進んで行動する	行動持続力
2	自己効力感／楽観性	自信を持つ。やればできるという確信を持つ	自信創出力
3	相互支援	互いに力を貸して助け合う	協働力
4	本質理解	事実に基づいて情報を分析し、本質を見極める	課題発見力
5	目標設定	ゴールイメージを明確にし、目標を立てる	計画立案力
6	独自理解性	他者との違いを認め、自己の強みを認識する	自信創出力
7	自己変革	学ぶ視点を持つ。経験を自己の変革に活かす	自信創出力
8	話し合う	相手に合わせて、自分の考えを述べる	統率力
9	検証／改善	結果を検証し、次の改善につなげる	実践力
10	ストレスコーピング	悪影響を及ぼすストレスを処理する	感情制御力
11	意見の調整、交渉、説得	意見を調整し、合意形成する。	統率力
12	建設的・創造的な討議	議論の活性化のために自ら働きかける	統率力
13	完遂	決めたことを、粘り強く取り組みやり遂げる	行動持続力
14	気配り	相手の立場に立って思いやる	親和力
15	意見を主張する	集団の中で自分の意見を主張する	統率力
16	良い行動の習慣化	自分なりのやり方を見出し、習慣化する	行動持続力
17	原因追究	様々な要因の中から、原因を明らかにする	課題発見力
18	リスク分析	リスクを想定し、事前に対策を講じる	計画立案力
19	対人興味／共感・受容	人に興味を持つ。共感し受け止める	親和力
20	ストレスマネジメント	緊張感やプレッシャーを力に変える	感情制御力
21	親しみやすさ	話しかけやすい雰囲気をつくる	親和力
22	セルフアウェアネス	感情や気持ちを認識し、自分の言動を調節する	感情制御力
23	実践行動	自ら物事にとりかかる、実行に移す	実践力
24	信頼構築	他者を信頼する、他者から信頼される	親和力
25	情報収集	適切な方法を選択して情報を収集する	課題発見力
26	役割理解・連携行動	自分や周囲の役割を理解し、連携・協力する	協働力
27	多様性理解	多様な価値観を受け入れる	親和力
28	修正／調整	状況を見て、計画や行動を柔軟に変更する	実践力
29	シナリオ構築	目標や課題解決に向けての見通しを立てる	計画立案力
30	相談・指導・他者の動機づけ	相談にのる。アドバイスする。	協働力
31	人脈形成	有効な人間関係を築き、継続する	親和力
32	情報共有	一緒に物事を進める人達と情報共有する	協働力
33	計画評価	自分の立てた計画を振り返り、見直す	計画立案力

図6 PROGテストの診断結果サンプル（要約版の裏面）

表6 リテラシーテストの結果（1年生）

受験者層	短大1年生 (34校、5,658人)	栄養系短大1年生 (7校、570人)	旭川短大1年生 (41人)
総合評価	3.5	3.7	3.7
Level. 1～3 (低)	46%	39%	41%
Level. 4～5 (中)	45%	49%	46%
Level. 6～7 (高)	9%	12%	12%
能力要素	情報収集力	2.8	2.9
	情報分析力	2.7	2.8
	課題発見力	2.6	2.8
	構想力	3.4	3.5
	言語処理能力	2.7	2.9
	非言語処理能力	2.4	2.4

△：有意に高い (p < 0.05)、▲：有意に低い (p < 0.05)

水準が12%であった。能力要素では、情報収集力が3.0、情報分析力が3.0、課題発見力が2.9、構想力が3.1、言語処理能力が2.9、非言語処理能力が2.5であった。短大全体、栄養系短大との比較では、総合評価では特に課題は見当たらないが、能力要素でみると、情報収集力、情報分析力、課題発見力などは高いが、構想力は低い傾向であった。

(2) 2年生の現状：情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力など、全般的に低傾向

リテラシーテストの結果（2年生）を表7に示す。受験者数は短大全体としては2,099人(16校)が受験し、その内、栄養系は104人(3校)であった。本学部生の総合評価は3.2であり、内訳としてはレベル1～3の低水準が53%、レベル4～5の中水準が35%、レベル6～7の高水準が12%であった。能力要素では、情報収集力が2.7、情報分析力が2.5、課題発見力が2.6、

表7 リテラシーテストの結果（2年生）

受験者層	短大2年生 (16校、2,099人)	栄養系短大2年生 (3校、104人)	旭川短大2年生 (43人)
総合評価	3.6	4.2	3.2 ▲
Level. 1～3 (低)	44%	28%	53%
Level. 4～5 (中)	45%	53%	35%
Level. 6～7 (高)	11%	19%	12%
能力要素	情報収集力	3.0	3.4
	情報分析力	2.8	3.2
	課題発見力	3.0	3.4
	構想力	3.5	3.9
	言語処理能力	2.8	3.3
	非言語処理能力	2.5	2.7

△：有意に高い (p < 0.05)、▲：有意に低い (p < 0.05)

構想力が3.2、言語処理能力が2.7、非言語処理能力が2.3であった。短大全体、栄養系短大との比較では、総合評価は全体として低く、能力要素においても、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力など全般的に低い傾向であった。

2. コンピテンシーテスト：人と自分にベストな状態をもたらそうとする力

(1) 1年生の現状：親和力や協働力などの対人基礎力が低い傾向

コンピテンシーテストの結果（1年生）を表8に示す。受験者数は短大全体としては18,616人（53校）が受験し、その内、栄養系は1,738

人（10校）であった。本学部生の総合評価は2.5であり、内訳としてはレベル1～3の低水準が65%、レベル4～5の中水準が30%、レベル6～7の高水準が5%であった。能力要素では、対人基礎力が2.7（構成要素：親和力2.9、協働力2.8、統率力2.4）、対自己基礎力が2.9（構成要素：感情制御力3.3、自信創出力2.8、行動持続力2.7）、対課題基礎力が3.1（構成要素：課題発見力3.1、計画立案力3.0、実践力3.4）であった。短大全体、栄養系短大との比較では、総合評価では低水準の分布が多く、能力要素で見ると親和力や協働力、統率力といった対人基礎力の構成要素が低い傾向であった。

表8 コンピテンシーテストの結果（1年生）

受験者層		短大1年生 (53校、18,616人)	栄養系短大1年生 (10校、1,738人)	旭川短大1年生 (41人)
総 合 評 価	総合評価	2.9	2.8	2.5 ▲
	Level. 1～3 (低)	45%	48%	65%
	Level. 4～5 (中)	49%	46%	30%
	Level. 6～7 (高)	6%	5%	5%
能 力	対人基礎力	3.3	3.1	2.7 ▲
	親和力	3.7	3.6	2.9 ▲
	協働力	3.6	3.3	2.8 ▲
	統率力	2.7	2.6	2.4 ▲
力	対自己基礎力	3.1	3.0	2.9
	感情制御力	2.9	2.9	3.3 △
	自信創出力	3.0	2.8	2.8
	行動持続力	3.3	3.3	2.7 ▲
要 素	対課題基礎力	3.1	3.1	3.1
	課題発見力	2.9	2.9	3.1
	計画立案力	3.1	3.1	3.0
	実践力	3.4	3.5	3.4

△：有意に高い (p < 0.05)、▲：有意に低い (p < 0.05)

(2) 2年生の現状：行動持続力や実践力が高い傾向

コンピテンシーテストの結果（2年生）を表9に示す。受験者数は短大全体としては9,521人（39校）が受験し、その内、栄養系は1,303

人（8校）であった。本学部生の総合評価は3.0であり、内訳としてはレベル1～3の低水準が43%、レベル4～5の中水準が43%、レベル6～7の高水準が14%であった。能力要素では、対人基礎力が3.1（構成要素：親和力3.5、協働

表9 コンピテンシーテストの結果（2年生）

受験者層		短大2年生 (39校、9,521人)	栄養系短大2年生 (8校、1,303人)	旭川短大2年生 (43人)
総合評価	総合評価	3.0	3.1	3.0
	Level. 1 - 3 (低)	41%	40%	43%
	Level. 4 - 5 (中)	52%	52%	43%
	Level. 6 - 7 (高)	7%	8%	14%
能力	対人基礎力	3.4	3.3	3.1
	親和力	3.7	3.7	3.5
	協働力	3.6	3.5	3.5
	統率力	2.8	2.8	2.7
要	対自己基礎力	3.3	3.4	3.3
	感情制御力	3.2	3.3	2.9 ▲
	自信創出力	3.4	3.5	3.1 ▲
	行動持続力	3.4	3.4	3.6
素	対課題基礎力	3.2	3.3	3.3
	課題発見力	3.1	3.3	3.2
	計画立案力	3.1	3.2	3.2
	実践力	3.5	3.7	3.8 △

△：有意に高い (p < 0.05)、▲：有意に低い (p < 0.05)

力3.5、統率力2.7)、対自己基礎力が3.3（構成要素：感情制御力2.9、自信創出力3.1、行動持続力3.6）、対課題基礎力が3.3（構成要素：課題発見力3.2、計画立案力3.2、実践力3.8）であった。短大全体、栄養系短大との比較では、総合評価では特に課題は見当たらないが、能力要素でみると、行動持続力や実践力が高く、親和力や感情制御力、自信創出力が低い傾向であった。

3. 学生向け解説会

PROGではテストの結果を基に、どのようにしてジェネリックスキルを伸ばしていけばよいのか、リアッセク社の担当者による学生向けの解説会も実施している。本学でも解説会を実施し、解説会のアンケート評価をみると、学生の9割以上がテストの結果に納得しており、解説会の満足度も76.9%と高評価であった。著者らも解説会に出席したが、とても分かりやすい説明でジェネリックスキルに対する学生の理解度も高まった様子であった。

Ⅲ. 考 察

1. 1年生と2年生のジェネリックスキルの比較

リテラシーとは、「知識を活用して問題を解決する力」であり、一般的に基礎学力と相関関係にある。しかしながら、リテラシーテストでは、1年生が3.7で2年生が3.2となり、2年生よりも1年生の方が高いという結果になった（表10）。そこで、1年生と2年生の1年次の前期終了時点の学内成績（GPA）を比較したところ、1年生は2.49、2年生は2.47とそれほど大きな違いは認められなかった。この2つの評価の乖離の要因の一つとしてGPAの算出方法が挙げられる。GPAはS（90点以上）、A（80点以上）、B（70点以上）、C（60点以上）、D（59点以下=不可）のレターグレードを4、3、2、1、0の数値に置き換えているため、レターグレード評価のもとになっている原成績の細かな差異が丸められて消えてしまっている。このようなGPAの不都合は、原成績を線形に変換して直接グレードポイントを算定するファンクシ

ショナル GPA (fGPA) を用いることによってある程度改善される。しかしながら、本学部では再試験が認められており、一度試験に不合格になっても再試験で合格すれば単位認定(可 = D: 60 点) されるため、GPA から fGPA に変更しても成績下位者の評価の底上げ自体は無くならず、外部評価との乖離も是正されない(したがって、この問題の解決策として、単位認定と GPA を切り離し、GPA は本試験のみで算出することも検討する必要がある)。実際、再試験の割合(専門科目)を比較すると、1 年生は 9.1% に対して 2 年生は 18% と約 2 倍も高く、現在の 2 年生の方が入学時において基礎学力の低い学生が多かったことが推察される。短大はその性質上、四年制大学と比べて入学生の学力格差が大きく、教員の方も入学年度によって学生の基礎学力に差があることを肌感覚として持っていたが、今回、PROG によって学生の真

の学力を確認することができたことは、入試方法や授業方法の見直しといった問題提起のためのエビデンスとしても重要である。一方、コンピテンシーは 1 年生が 2.5 で 2 年生が 3.0 となり、2 年生の方が高くなった。コンピテンシーとは、「人と自分にベストな状態をもたらそうとする力」であり、リテラシーのような基礎学力との相関はあまりなく、経験を積むことで高まると考えられている。今回の PROG 受験は後期開始後(9 月)であり、2 年生は夏休み期間を利用して校外実習を終えた直後になる。したがって、2 年生の 1 年次のコンピテンシーは測定していないが、校外実習で実際に栄養士業務を経験することで対人基礎力や対自己基礎力といったジェネリックスキルが高まった結果、2 年生のコンピテンシーが高くなったと考えられる。

表 10 旭川大学短期大学部の 1 年生と 2 年生のジェネリックスキルと学内成績

生活学科 食物栄養専攻	ジェネリックスキル		学内成績	
	リテラシー	コンピテンシー	GPA	再試率
1 年生	3.7	2.5	2.49	9.1%
2 年生	3.2	3.0	2.47	18%

学内成績については 1 年生、2 年生のどちらも 1 年次の前期終了時点のデータを使用

2. PROG を利用したディプロマポリシーの検証

旭川大学短期大学部生活学科食物栄養専攻のディプロマポリシー(DP)を表 11 に示す。DP. 3 については 2 年次の後期に実施される資格試験「栄養士実力認定試験」(一般社団法人全国栄養士養成施設協会)によって検証することができるが、DP. 1 や DP. 2 については、社会人基礎力でいうところの、「チームで働く力」や「前に踏み出す力」が含まれており、これらは専門知識のみを問う栄養士実力認定試験では評価することは難しい。一方、学内成績(GPA)は、班単位で行う実習や実験などの科目においては、親和力や協働力などのジェネリックスキルもある程評価しているかもしれないが、そもそも GPA 自体が学内評価であるため、上述のよう

に客観性についてはどうしても疑問が残る。そこで、こうした課題を解決するために PROG で測定したジェネリックスキルを用いた DP の検証法を検討した。以下にその手順を示す。

表 11 旭川大学短期大学部生活学科食物栄養専攻のディプロマポリシー

DP.1	サービスを受ける利用者に対して、人権・人格を尊重し、良心と愛情をもって接するとともに、同僚および他の関係者に対しては、互いに尊敬し、協働して人々のニーズに応える能力を有するひと
DP.2	多様化する現代社会において、高い知識と技術の水準を維持・向上するように積極的に研鑽する能力を有するひと
DP.3	専門職としての栄養士の尊厳と責任を自覚し、科学的根拠に基づいた栄養指導を実践する能力を有するひと

まず、横軸に DP を、縦軸に GPA、栄養士実力認定試験、そして PROG テストのコンピテンシー項目をとる。リテラシー項目に関しては、今回リテラシーテストも受験させているが、「PROG は主として 4 年制の大学生を対象にしているため、短大生には難易度が高い」、「短大生のほとんどは専門職（栄養士）に就き、全員が資格試験（栄養士実力認定試験）を受験する」ということを考慮して、検証項目から除外している。このようにして DP との対応をみると、DP.1～3 に含まれるコンピテンシーとしては、

対人基礎力（DP.1）、対自己基礎力（DP.2）、対課題基礎力（DP.3）が該当することになる（表 12）。実際の作業手順としては、学科・専攻ごとに、まず、ディプロマポリシーを構成する能力を抽出する。次に、その能力要素に該当する測定項目を当てはめていくという流れになる。今回は 9 項目のジェネリックスキルのみで評価しているが PROG は最大 40 項目ものジェネリックスキルを測定しているのでより詳細な検証が可能である。

表 12 ディプロマポリシーの構成能力と社会人基礎力との対応

旭川 生活 大学 学科 短期 大学 専攻	専門的 知識・技能		コンピテンシー (社会人基礎力テスト「PROG」)									
			汎用的									
	G	P	A	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
親和力				協働能力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力	
DP.1	△	×	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-
DP.2	△	×	-	-	-	○	○	○	-	-	-	-
DP.3	△	○	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○

○：評価できる、×：評価難しい、△：参考程度に評価できる

次に、DP の構成能力と社会人基礎力との対応表を基に DP を検証したものが表 13 である。今回が初めての PROG 受験であるため、本研究

では、1 年次、2 年次はそれぞれ 1 年生と 2 年生のデータを便宜的に用いたが、本来ならば、同じ学生に 1 年次（例えば入学直後）、2 年次

(例えば2年前期終了時)と連続受験させることにより、その成長度合いを測ることができる。以上より、DPの検証内容や結果については省略するが、ジェネリックスキルを学内成績(GPA)や資格試験(栄養士実力認定試験)と併用することにより、DPをより詳細に検証できる可能性が示唆された。

本研究ではディプロマポリシー(DP)を検証するための一方策としてPROGを取り上げたが、PROGには幅広い活用法が提示されてい

る。例えば、本研究とも重なるが、「DP・CPに基づく教育成果」をはじめ、「APに基づく入試選抜の効果」、さらには「認証評価のエビデンス」や「IRデータとしての活用」などにも活用されている。一方、視点を変えると、学生の個別面談を進める際の資料としても十分に活用できることから、ポートフォリオ(の一部)として活用することを検討してみるのも面白いかもしれない。

表 13 ディプロマポリシーの検証例

旭川大学 生活学科 短期栄養 大学専攻 部	DP.1			DP.2			DP.3				専門的 知識・技能	
	汎用的コンピテンシー 社会人基礎力テスト「PROG」											
	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力					
	親和力	協働能力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力	G		栄養士実力認定試験
1年次	2.9	2.8	2.4	3.3	2.8	2.7	3.1	3.0	3.4	2.49	38.3	
	2.7			2.9			3.1					
2年次	3.5	3.5	2.7	2.9	3.1	3.6	3.2	3.2	3.8	2.47		
	3.1			3.3			3.3					
全国平均	3.7	3.5	2.8	3.3	3.5	3.4	3.3	3.2	3.7		45.7 (50.2)	
	3.3			3.4			3.3					

コンピテンシー：1年次、2年次はそれぞれ1年生と2年生のデータを、全国平均は全国の栄養系短大2年生のデータを用いた。GPA：1年次、2年次はそれぞれ1年生と2年生の1年次前期終了時のデータを用いた。

栄養士実力認定試験：全国の栄養士系の大学生(3年生)・短大生(2年生)が受験する。成績が悪いと栄養士免許が取れないということではないが、85点満点で得点によりA、B、Cの3段階に評価される。データは2018年(12月)の結果であり、()は4年制大学の平均点である。

謝 辞

本研究にあたり、株式会社リアセックの赤坂武道氏にはPROGテストの実施と学生向け解説会の開催、さらにはディプロマポリシーの検証法について貴重なアドバイスを頂き、心より感謝の意を表す。

摘 要

ディプロマポリシー(DP)の検証を目的として、旭川大学短期大学の学生(生活学科食物栄養専攻)に社会人基礎力テスト「PROG」を試験的に受験させ、学生のジェネリックスキル(社会で求められる汎用的な能力・態度・志向)の評価を行った。他大学の同学年生と比較して、

1年生は、リテラシー（知識を活用して問題を解決する力）に関しては情報収集力や情報分析力、課題発見力などは高いが構想力は低く、コンピテンシー（人と自分にベストな状態をもたらそうとする力）に関しては対人基礎力の構成要素である親和力や協働力などが低い傾向であった。一方、2年生は、リテラシーに関しては全般的に低く、コンピテンシーに関しては行動持続力（対自己基礎力の構成要素）や実践力（対課題基礎力の構成要素）が高い傾向であった。以上のことから、ジェネリックスキルを学内成績（GPA）や資格試験（栄養士実力認定試験）と併用することにより、DPをより詳細に検証できる可能性が示唆された。

参考文献

1. ジェネリックスキル成長支援プログラム「PROG」、
http://www.riasec.co.jp/prog_hp/.
2. ジェネリックスキル測定・育成ツール「PROG」のご案内、学校法人河合塾・株式会社リアセック.
3. PROG 全体傾向報告書：旭川大学短期大学部、株式会社リアセック、2018年10月19日.
4. PROGの強化書 ver.7、株式会社リアセック.
5. Functional GPA. お茶の水女子大学：教学IR・教育開発・学修支援センター
(<https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdecrde/fgpa1.html>)
6. PROG 白書 2018：企業が採用した学生の基礎力とPROG 研究論文集、PROG 白書プロジェクト編、学事出版、2018年11月.

和島 孝浩 佐々木千夏 椎名 澄子 北島 滋